

1. はじめに

周囲を山で囲まれ、町中を清流が流れている地方の中小都市の中で、市街地が町家や社寺などによって歴史的な町並みを形成している魅力的な都市がある。これらは小京都と呼ばれ、歴史都市としての魅力的な景観を有しつつ、山紫水明の地としてしっとりとした雰囲気醸し出している。

そこで、本研究では代表的な小京都の中から、過年度に調査を実施した秋田県角館町における住民へのアンケート調査結果と、ほぼ同じ人口規模の町[※]である岐阜県八幡町の住民を対象に実施したアンケート調査結果から、小京都らしさを演出している景観構成要素に対する住民の意識と、両町が実施している景観整備事業に関する住民の評価などを比較分析することにより、これらの関係を明らかにするものである。

2. 調査の方法と内容

調査はそれぞれ角館では1998年7月、八幡では2000年10月に実施した。調査方法は両町の住宅500戸を対象として、1戸当り3票のアンケート用紙を入れた封筒を無作為に各戸配布し、郵送による回収とした。調査票の回収状況は表-1に示すとおりである。また、調査の設問内容は個人属性、小京都らしさ、小京都らしさを演出する景観構成要素および景観整備事業の実施状況とその評価などに関する項目である。

3. 小京都らしさの分析結果

(1) 住民が感じている小京都らしさ

住民が感じている小京都らしさの程度については、角館の「非常に持っている」と「まあまあ持っている」

の小京都らしさを肯定する意見は約85%で、八幡のそれの64%を約20%上回っている。とくに角館の「非常に持っている」は八幡の約2.7倍であり、角館の住民は自分たちの町を『小京都』として認知していることがわかる(図-1参照)。

(2) 小京都らしさを形成する景観構成要素

小京都らしさを演出している景観構成要素を明らかにするため、「山」「川」などの6つの要素を第1位から3位までの順位付けによる回答を求めた。順位付けを生かすため、第1位選択は5点、2位選択は3点、3位選択は1点とウエイト付けを行い、それぞれの選択数に乘じた値を要素別に合計し、町別の構成率を示したものが図-2である。これをみると角館では「町並み」が40%と高率で、「樹木」「文化財」が続いている。一方、八幡では「川」と「山」が30%前後と高く、「町並み」がこれに続いている。このうち角館の「町並み」は武家屋敷、「樹木」は武家屋敷の屋敷林が占めていると考えられ、八幡の「川」は自然豊かな吉田川が重きをなしていると考えられる。

以上のことから、角館では人為的要素の「町並み」や「文化財」、八幡では自然的要素の「山」や「川」が小京都らしさを構成するうえで重要な役割を担っているといえよう。

(3) 景観構成要素の年齢階層別比較

角館町と八幡町の景観構成要素を年齢階層別に比較したものが図-3と図-4である。ここで、20~30才代を若年、40~50才代を中年、60才以上を熟年とした。この結果から、両町とも「山」や「川」では年齢が高くなるにつれて割合が高くなっており、「文化財」や「装置・小道具」ではその逆になっている。このこと

表-1 アンケート調査の結果

	角 館	八 幡
配布数	500通	500通
回収数	87通	191通
回収率	17.4%	38.2%
有効票数	187票	410票
票/通	2.15	2.15

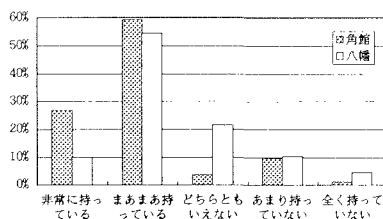


図-1 住民からみた小京都らしさの町別比較

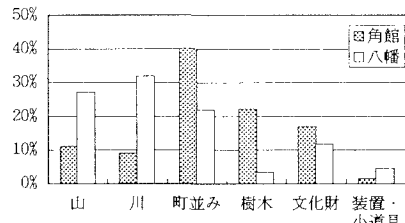


図-2 住民が選択した景観構成要素の町別比較

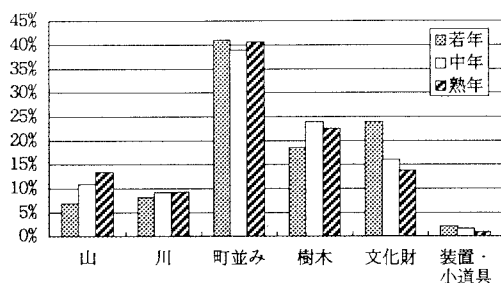


図-3 角館における年齢階層別の景観構成要素

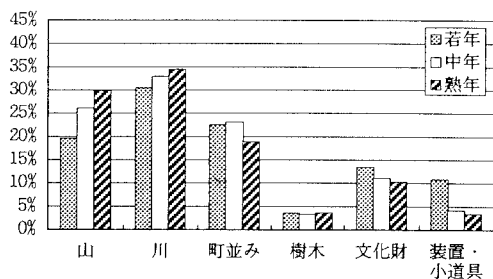


図-4 八幡における年齢階層別の景観構成要素

表-2 景観整備事業に関する住民の認識

	角 館	八 幡
実施を知っている	75.0%	67.3%
実施されていない	2.3%	7.3%
わからない	22.7%	25.4%
計	100%	100%

表-3 景観整備事業に対する住民の評価

	角 館	八 幡
非常に良くなった	14.2%	7.6%
良くなった	73.5%	70.7%
変わらない	11.0%	15.9%
悪くなった	0.0%	4.7%
非常に悪くなった	1.3%	1.1%
計	100%	100%

表-4 今後の景観整備事業に関する住民の意見

	角 館	八 幡
積極的な整備	31.6%	23.0%
ある程度の整備	54.4%	55.6%
最小限の整備	12.3%	16.8%
整備の必要なし	1.7%	4.6%
計	100%	100%

から、「町並み」と「樹木」については年齢による明確な影響は見受けられなかったものの、年齢が低いほど人為的景観構成要素を選択する傾向があり、逆に年齢が高くなるほど自然的景観構成要素を選択する傾向があるといえよう。

4. 景観形成事業に関する分析結果

(1) 景観形成事業に対する認識と評価

景観形成事業が行われている事に対する住民の認識程度は、表-2に示すように角館の「知っている」と回答した人の割合が八幡より約8%高い。さらに、景観形成事業が実施されていることを知っているとは回答した住民を対象として、その事業後の評価を尋ねたところ、「非常に良くなった」と回答した角館の住民の割合は、八幡の約2倍である。また、「悪くなった」と「非常に悪くなった」を加えると、角館の1.3%に比べて八幡では5.8%と高率であることから、角館の住民の方が景観形成事業を評価していることがわかる(表-3参照)。

(3) 今後の景観形成事業に対する考え

今後の景観形成事業に対しては、「積極的に整備すべきである」と「ある程度の整備は行うべきである」といった整備を容認する人が、角館では86%、八幡では約79%と約8割を占めている。しかし、その内訳をみると、角館の積極的整備は約32%で八幡より約9%高くなっている。一方で、消極的整備および整備の必

要性がないは八幡の方が高率である。このことから、八幡町民は景観整備を容認しながらも積極的な整備はあまり望んでいないことがわかる(表-4参照)。

5. まとめ

本研究から、小京都らしさについて角館の住民は角館を『小京都』として強く意識しており、小京都らしさを演出している景観構成要素に対しては「町並み」や「樹木」といった人為的要素を主に選択している。一方、八幡の住民は「川」や「山」のような自然的要素を、小京都らしさを構成するうえで重要な要素に挙げている。また、年齢が低いほど人為的景観構成要素を、逆に年齢が高くなるほど自然的要素を選択する傾向があることがわかった。

一方、景観形成事業に対する住民の認識や評価については、人為的景観構成要素を多く選択している角館では景観整備事業の評価が高く、今後も積極的な整備を容認している。逆に、自然的景観構成要素の選択率が高い八幡では、景観整備事業に対する評価が角館より低く、今後の景観整備事業に対しても角館より消極的である。このことから、小京都らしさを演出する景観構成要素の選択状況と景観整備事業に対する評価等に関連性があることがわかった。

補注

秋田県角館町は「みちのくの小京都」と呼ばれ人口1万6千人であり、岐阜県八幡町は「奥美濃の小京都」と呼ばれ人口1万8千人である。